

1 体育・保健体育科で願う豊かな学びの姿

本学校園体育・保健体育科では「運動の心地よさを味わわせ、表現する力をのぼす体育・保健体育学習」をテーマに一貫した体育・保健体育学習の研究を行ってきた。その中で子どもたちの豊かな学びの姿を次のような姿と考えている。

- 挑戦する意欲をもっている姿。(意欲、耐性)
- 体を動かしたくなる、動くともちいいと感じている姿。(情緒)
- 身体を動かしている姿。(技能・体力)
- 運動を習慣的に行っている姿。(活用)
- 技能構造を追求し、考えている姿。(思考・知識)
- 仲間とかかわっている姿。(協力)
- 自分や仲間の姿を観察し、思ったことを言葉や身体をつかって説明している姿。(思考・判断・表現)

体育における学習場面には、自分の運動している姿が見えづらく、動きのイメージがわきにくい状況がある。したがって、仲間から自分の動きを見られ、伝え合うことは、自らの課題を見付け、それを解決していくことにつながっていく。言葉や動きなど、自分なりの表現方法で伝え合うことで、思考が深まり、「〇〇するとよさそうだ」、「〇〇してみよう」と判断し、こつを意識しながら練習をすることで、さらなる技能の向上が見られると考える。

2 体育・保健体育科における思考力・判断力・表現力とは

子どもたちの「やってみたい」という追求の心は本来備わっている欲求の一つであり、この気持ちこそが課題を解決するために考えようとする力、まさに「思考力・判断力」であり、「できる・わかる」ために最も大切であることがこれまでの研究において実証された。その時に生じる「思いや考え(今までの遊びや生活、学習経験をもとに、自分や仲間の課題、そしてその解決方法)」を他者に伝える(表現力)ことで互いに高め合い分かり合える喜びを感じ、「やってみたい」という思いさらにを強め、次への意欲へとつなげていくことができる。

動ける身体の基盤の上に「やってみたい」と思える運動の心地よさが味わえれば、運動に向かう気持ちは高まり、自然と動き出したり、できるようになるために思考を巡らせたりしながら、さらなる動ける身体をもつことができるだろう。そして、その気持ちや感覚は残り、生涯を通じて運動に親しみ、その結果として体力が向上し、人とのかかわりが深まるはずである。

これらを踏まえながら、思考力・判断力・表現力についての11年間のつながりを下のように考え取り組んだ。

初等部前期	遊びやたくさんの運動を経験し、自分の「やってみたい」という思いをもち、表すことができる。
初等部後期	これまでの運動経験をいかし、自分の課題を見付け、運動のポイントを考え、運動することができる。
中等期	既習の基本的な知識・技能をもとに自分や他者の課題を発見し、適切な解決方法を選択し、考え、実践することができる。

11年間の学びの中で、子どもたちに運動の心地よさを味わわせることで「もっとできるようになりたい」という意欲につなげてきている。また、「できそうだ」という感覚をもたせるために、子どもたちの実態をとらえ、様々な運動感覚を体感させてきた。その上で、系統的な運動の視点を設けながら、学び合いの場面を設定することで、意欲をもって取り組み、課題を見付けるためにかかわり合おうとする子どもたちの姿が見られるようになっていく。

運動の心地よさを味わわせながら、思考・判断したことを表現する力をのぼしていく中で、子どもの動きやふりかえりを見て、一人一人の課題や考えを2軸に表し、とらえていった(図1)。それをもとに、一人一人がのびていくためには、次時にどのようなはたらきかけが必要であるのかを考え、取り組んでいる。このように個々の子どもの1時間ごとの様子を教師がとらえておくことで、意図的なはたらきかけをし、学びを深めている。

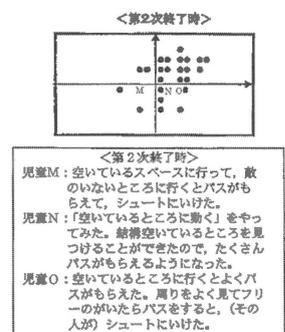


図1

3 思考力・判断力・表現力を育成するために

(1) 学びをいかす

子どもたちは、学習の中で、過去の運動経験をいかすことで次の学びへとつなげている。体育・保健体育科における学びをいかす姿は、図2のように高まっていく。初等部前期から中等部まで、1時間の授業は、予想（前時のふりかえりをもとに）→1回目の試行・批評（小集団）→説明・予想（試行・批評をもとに学級全体で）→2回目の試行・批評（説明・予想をもとに）→見いだす（次の課題へ）という流れで行うことが多い。この流れの中で、子どもが自分の動きや課題をイメージした上で、より多くの人の考えにふれられるようにすることが大切である。

表現運動を例として挙げると、自分の表したい感じをさらに表していくために、相手の動きを見て、表現のイメージを広げたり、相手に自分の表現を見られてアドバイスをもらい、自分の今の動きをとらえたりしていくことがある。そのようにすることで、学級全体で話し合う際の一人一人の考えが、より深まっていく。そこで生まれた新たな課題に向かって、次の追求が始まっていくのである。

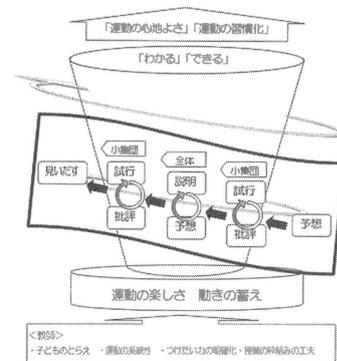


図2

(2) 学び合い

体育・保健体育の学習では、自分の動きを見ることが難しいため、自分の動きをイメージすることも難しい。そのため、子どもが学びをいかせるようにするためには、小集団で試行や批評を繰り返し行う学び合いが重要となる。それは、小集団において、次のような学び合う場面が考えられるからである。

- 出会った運動において、自分の考えを確かめるために試しに動いて、調整しながらよりよいものにしていく。（試行）
- 動きを見合うことで、互いの考えについて評価（アドバイス）し合い、見えにくかった自分やチームの動きを視覚化していくことで、よりよいものを求めている。（批評）

この試行と批評を繰り返すことにより、自分では見ることの難しい自分（チーム）自身の動きを視覚化していくことができる。自分ができていること、できていないこと、また、そこから生まれる課題をもとに、思考力・判断力・表現力を育成し、技能を向上させていくことができるのである。このようにして、自分に蓄えられていった経験を、さらに積み重ねていきながら、自分（チーム）の変容を感じ取り、さらに高めていくことができるようになる。

(3) 教師のはたらきかけ

個に応じた教師のはたらきかけがグループでの学び合いを深め、技能の習得においても重要となってくる。ここで、子どもが伝えたいことをより明確にし、全体が共有できるように考えを掘り下げることが必要である。また、これまでの子どもの思いや考え、知識と比較することで思考をゆさぶったり、新しい考えを実感できたりするような直接的な教師のはたらきかけも効果がある。さらには、動きを視覚化し、より学びを深めていくことができるよう、子どもたちに学習課題を提案することも行っている。そして、子どもたちが主体的に活動することができるよう、付けたい力をもとにふりかえりを工夫し、子どもの思いや考えを全体に表現し、共有できる場を設定していくことで、次に自分たちが学びたいことを考えることができるようにしている。

例えば、バスケットボールにおいて、コートに意識が向くように、コートのどこの部屋を使っているのか記録することを提案するはたらきかけを行った。すると、図3のように、子どもたちの動きに変容が見られるようになった。子どもたちはコートを広く使うことのよさ、敵や味方がいないところへ動くことのよさがわかっていった。子どもたちが学びを深める機をとらえて、「コート部屋」を示したことでさらに学び合いが活発になり、パスやシュートが多くなり、積極的にシュートに行く場面が見られた。

このような学び合いの場面を意図的に設定することにより、子どもたちの思考や判断が促され、次の「やってみたい」へとつながっている。さらに、動きを見る子どもたちの目が育ち、それを言葉や動作で伝える力が伸びていった。

（文責 小草 康弘）

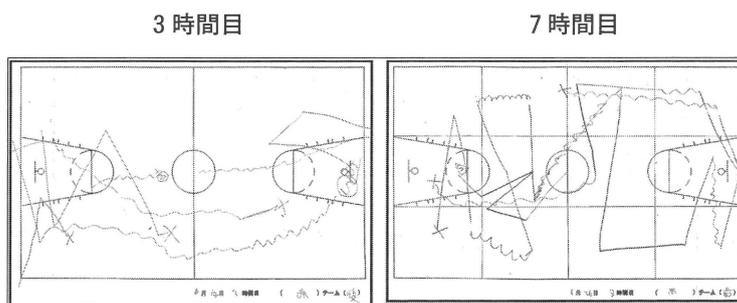


図3